

旧約の労働観 עֲבָד 'abad をめぐって

The Old Testament's View of Labor

楠 本 史 郎*

Abstract

Jahwist views labor as the ministry and substance of human beings entrusted with the management of the created world. The wise man of Proverbs recommends them to work hard and not to be idle, warning them the danger of wealth. Prophets take notice of the social structure that produces the poor in spite of their will to work. They, however, tell that the Lord rules the world and will give the fruit of labor on His day. But man has been created not only to work, but to worship the Lord, the Creator and the Releaser on the Sabbath. Worshipping on the Sabbath becomes to have the real meaning of other working six days.

キーワード：旧約／労働／職業／安息日

はじめに

職業ないし労働についての評価は、時代と地域によって異なる。

古代ギリシアにおいては、初め、労働に積極的な意味を認める者もあったが、時代が下るにしたがい、評価は消極的になる。

紀元前 700 年頃に活動したヘシオドスは、黄金、銀、青銅、英雄、鉄の五つの時代を区別し、現在の鉄の時代における労働の重要性を認めた。「人間は労働によって家畜もふえ、裕福にもなる、また働くことでいっそう神々に愛されもする。また人間にもな——神も人も怠け者をいたく嫌うのだ。労働は決して恥ではない、働かぬことこそ恥なのだ」¹⁾と述べている。ゼウスの正義を信じ、労働に励むべきであると勧め、労働の意義を説いた²⁾。

一方、紀元前 5 世紀になると、ソクラテスは魂を良いものとするよう主張し、そのため、富や名誉を求めることに対して消極的であった³⁾。

プラトンはヘシオドスによる時代区分やソクラテスによる魂の知の強調を受け継ぎ、人間を 3 種

に分ける。魂を、①理知的部分、②気概の部分、③欲望の部分に区別し、①は高次の、知を求める人すなわち哲学者・支配者に対応し、②は名誉を求める人すなわち軍人など、③は金銭を求める人すなわち生産者や商人等の職業人などに対応するとしている。

「君たちのうち支配者として統治する能力のある者には、誕生に際して、金を混ぜ合わせたのであって、それゆえにこの者たちは、最も尊重されるべき人々なのである。またこれを助ける補助者としての能力ある者たちには銀を混ぜ、農夫やその他の職人たちには鉄と銅を混ぜ与えた」⁴⁾

ここでは、支配者を金、その補助者を銀、農夫や職人を鉄と銅と位置づけ、労働を最下位にあるものとしている。さらに彼は、こうした三分法を超越したり、職業を自由に選択したりすることを認めていない⁵⁾。

ギリシア・ローマ世界は奴隷制度によって支えられていた。少数の自由な市民は、日常的労働を多数の奴隷階層に委ね、政治と軍事、芸術、文化、教育などの活動に専念していた。そのような社会においては、職業や労働は積極的な評価を受けることがなかった。

翻って現代日本社会においては、とくに 21 世

* Shiro KUSUMOTO
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
キリスト教入門

紀に入り、長く続いた終身雇用の労働体系が崩れつつある。労働市場の「自由化」にともない、派遣労働やパート労働など、非正規雇用が拡大した。この部分は企業の生産活動の調整弁とされ、景気の動向に密接に結びついている。生産の拡大時には、労働強化を要請され、縮小時には真っ先に解消される運命にある。社会保障の恩恵からも遠い。この傾向は、単純労働の分野で顕著である。そのため、被雇用者は職業選択の幅を狭められ、また自分の仕事に誇りを持つことができにくくなっている。自身の性格や適性、経験、志などによって職業を選び、仕事をとおして国家社会の形成に参与する道が狭められている。その結果、ただ報酬の多寡や労働の軽重、職場の安定性、社会的地位の高低などだけが職業選択の動機となりかねない。就職競争に敗れた者は、不安定なパートタイムやアルバイト、派遣労働に頼り、生活を安定させることができない。仕事があるにも拘わらず十分な生活資金を得ることができない、いわゆるワーキングプアが存在が社会問題となっている。

さらに2008年秋に米国で発生した金融不安が発火点となり、世界不況と雇用悪化が引き起こされた。その波は、輸出に多くを頼る日本経済に重くのしかかっている。いよいよ雇用不安は高まり、働く意義を見出しにくくなっている。

そのなかで、職業や労働、ひいては自分の生き方を見つめ、それを求めて社会形成に参加するためには、労働の意義を十分認識することが重要と思われる。このことに関して、旧約聖書は何を語るのだろうか。小論は、微力ながら、この課題に取り組むものである。

1. 関連語句の分析

以下では、小論に関係する旧約の語句を取り上げ、分析する。表1～4を参照⁶⁾。

1) עָבַד 表1 参照

仕事や労働、働く、仕えるなど、旧約で317回用いられ、もっとも広く労働を表す語句である。以下では、おもに『新共同訳聖書』の翻訳に拠り、意味ごとに用法を確認する。

(1) 「働く」、「労働する」

創世記全体で23回用いられ、うち11回がこの意味である。とくに29-31章における、ヤコブ

とラバンとのやり取りに集中して用いられる⁷⁾。

出エジプト記では31回のうち、6回がこの意味で用いられ、エジプトで奴隷となっていたイスラエルの労働に関して使われている⁸⁾。

民数記では21回中、19回がこの意味で使われているが、おもにレビ人祭司の職務、仕事、作業に関連して用いられる⁹⁾。

(2) 「(畑を) 耕す」

旧約全体ではこの意味での使用が17回、認められる。そのうち5回は創世記に、それも2-4章のヤーウリスト(J)資料に集中している¹⁰⁾。この点の検討が後の課題となる。

(3) 「(人に) 仕える」

旧約全体ではこの意味で61回使われている。そのなかでエレミヤ書がもっとも多く、19回、用いている。そのうち12回は25章および27-28章に出る。エレミヤはそこで、エルサレムがバビロニア軍の前に陥落し、ユダの民がネブカドネツアル王に仕えるようになると預言する¹¹⁾。また40:7以下では、ユダに残った民にゲダルヤが、バビロニア王に服従することを勧めるのに、この語を用いている。

(4) 「奴隷にする」

創世記と出エジプト記にそれぞれ1回、エレミヤ書で3回、用いられている。

(5) 「(神に) 仕える」

この意味での使用が147回と最多である。

出エジプト記では、出エジプトの目的として、民が神に仕えることが挙げられており¹²⁾、その関連で、モーセとファラオの交渉が記される7-12章に頻出する¹³⁾。出エジプトはイスラエルの民にとって、たんなる政治的解放ではなく、自由に主を礼拝することを意味していた。

また申命記に26回、いわゆる申命記的歴史家の手になると言われるヨシュア記、士師記、サムエル記上下、列王記上下でも61回、あわせて87回の使用が認められる。申命記および申命記的歴史の7書において118回出るこの語のうち、74%がこの意味で使われている。紀元前6世紀の新バビロニアによるエルサレム陥落とユダ王国の滅亡、それに続くバビロン捕囚を目の当たりにし、申命記的歴史家はその原因を、イスラエルの民が主なる神に仕えず、もろもろの神々に心惹かれて

きた歴史的な罪に求めた¹⁴⁾。

歴代誌上下は、エルサレム神殿を拠点とする祭司的伝承を中心とした独自の歴史観に立つが、資料の多くを申命記的歴史に負っている。その結果、この意味での語の使用が多くを占める。

エレミヤもまたこの意味で12回使用している。そのうち10回は「神々に仕える」という否定的

な意味で用いる。崩壊へと向かうユダ王国に対して、主なる神を離れ、神々へと心移していく罪を鋭く指摘し、警告しつつける¹⁵⁾。

(6)「造る」、「行う」

エズラ記は15回の使用全てが、この意味である。ダニエル書12回もまた同様である。これらにおける意味は、עֲשָׂהに近い¹⁶⁾。

表1～4 おもに新共同訳による訳語の分類

	表1 עֲבַד 'abad							表2 עֲבַד 'ebed	表3 עֲבוֹדָה 'abodah	表4 חָרוּץ haruṣ						
	働く	耕す	人に仕える	奴隷にする	神に仕える	造る 行う	計	僕、召使、 奴隷、家 来、部下、 家臣	労働 仕事、奉仕、 儀式	堀、溝	打穀機	裁き	金	勤勉	他	計
創世記	11	5	6	1			23	88	2							0
出エジ	6		4	1	19	1	31	43	23							0
レビ記	3						3	9	7	1						1
民数記	19		1		1		21	11	50							0
申命記	4	2	3		26		35	29	1							0
ヨシュア	1				20		21	27	1							0
士師記			6		11		17	11								0
サム上		1	4		9		14	62								0
サム下			4		1		5	107								0
列王上			4		4		8	77	1							0
列王下			2		16		18	58							1	1
歴代上			1		1		2	27	30							0
歴代下	1		1		10		12	44	15							0
エズラ						15	15	6	1							0
ネヘ					1		1	22	4							0
エステル							0	7								0
ヨブ記			1		2		3	12			1					1
詩編			2		6		8	57	2				1			1
箴言		2					2	10					4	5		9
コヘレ	1	1					2	4								0
イザヤ	5	1	1		2		9	40	4		2					2
エレ	2	1	19	3	12		37	33								0
哀歌							0	1	1							0
エゼ	5	3			2	1	11	8	3							0
ダニ						12	12	7		1						1
ホセア			1				1									0
ヨエル							0	1				2				2
アモス							0	1			1					1
ミカ							0	1								0
ゼファ					1		1									0
ハガイ							0	1								0
ゼカ		1					1	3					1			1
マラキ			1		3		4	2								0
計	58	17	61	5	147	29	317	809	145	2	4	2	6	5	1	20

2) עֶבֶר 表2 参照

動詞 עֶבֶר から派生した名詞であり、「僕」、「召し使い」、「奴隷」、「家来・部下」、「家臣」などと訳される。旧約全体で 809 回用いられている。多くは「僕」や「召し使い」と訳されるが、出エジプト記やサムエル記上下、列王記上下では、古代エジプト王制や、ダビデによるイスラエル王制の確立を背景に、「家臣」と訳されることも多い。

一方、申命記では「奴隷」と訳される場合が多い。これは同書がとくに、奴隷の家エジプトから民を救い出した神の恵みを強調しているためと考えられる¹⁷⁾。

またイザヤ書ではほとんどが「僕」と訳されるが、そのうちの多くが 40—55 章の第二イザヤによって用いられている。この「僕」は、イスラエルないしヤコブの民を指す場合¹⁸⁾と、「主の僕」を指す場合がある¹⁹⁾。

3) עֲבוּדָה 表3 参照

やはり動詞 עֶבֶר から派生した名詞であり、145 回使用されている。出エジプト記では 23 回用いられ、6 章までは「労働」(1:14)と訳され、エジプトで奴隷であった民に課せられた苦しい労働を指す。「労役」(イザヤ 14:3)、「苦役」(哀歌 1:3)、「労苦」(エゼキエル 29:18)とも訳され、労働の辛さ、過酷さが強調されている。

一方、出エジプト記 12 章以下では祭儀に関する規定に関連し、「儀式」(12:25)、「祭儀」(27:19)、「奉仕」(35:24)、「仕事」(36:1)、「作業」(39:32)、「務め」(39:40)などと訳される。また民数記では 50 回と際立って多く出るが、幕屋の仕事など、レビ人の務めへの言及に伴っている。歴代誌上下で 45 回使用されているのも、同様の事情による。

したがって、旧約においてこの語は、大半は、神に仕える聖なる務めや儀式を意味している。また世俗の一般的な職業や労働を指す場合には、労働の過酷さなど消極面をも含む。

4) חָרוּץ 表4 参照

鋭く彫られた「溝」や「堀」(ダニエル 9:25)を意味し、そこから「打穀機」(イザヤ 28:27、41:15、アモス 1:3)、「裁き」(ヨエル 4:14)、さらには「(黄)金」(詩 68:14、箴言 3:14、8:10、8:19、16:16)や「勤勉」(箴言 10:4、12:24、12:27、13:4、21:5)の意味が派生した。旧約では 20 回、

使用されている。うち 9 回が箴言で用いられる。そこでは、知恵には黄金以上の価値があり、また労働に励むことが真の幸福を生むと勧められている。

2. ヤーウィスト (J) における労働

1) 人間の創造における労働の意味

創世記 2:4b より、J 資料による天地創造物語が始まる。ここで注目するのは 15 節である。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し עֶבֶר、守る שָׁמַר ようにされた。」

「耕す」すなわち耕作による労働と、「守る」すなわち見張って園を保護することが、神が人間に与えた本質的な務めである。前者は農民の務めを、後者は庭師や牧羊者の務めを表すとも考えられる²⁰⁾。

J 資料におけるエデンの園(いわゆる「楽園」)は、労働と無縁の桃源郷ではない。むしろ、

「人間はこの園を耕し、あらゆる侵害からそれを守るべきなのである。…この原初の状態においてもまた、労働が人間の使命であることが淡々と記されているのである²¹⁾。」

「人間の定め之初めから、神はこの特別な被造物に園を委ねることを決められているのである²²⁾。」

人間が罪を犯した結果、初めて罰として労働が科せられたのではない。神は世界を創造し、これを賜物として人間に与えた。さらに、この賜物である被造世界を意味あるものとするために労働し、また守り²³⁾、維持する働きを人間に委ねた。そもそもそのために人間を創造し、働く使命を与えた。したがって労働は人間の本質的な部分をなす。

この事情は、祭司 (P) 資料による天地創造物語(創世記 1:1–2:4a)においても変わらない。人間の創造にあたり、神は被造物世界を「支配する」務めを人間に委ねる²⁴⁾。神が人間を創造する目的は、「海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配 רָדָה」(同 1:26)させることである。実際に人間が創造された後には、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ כָּבַשׁ」(同 1:28)という言葉我的祝福として人間に与えて

いる。この「支配する」、「従わせる」という二つの語はともに、人間による世界の恣意的な搾取や収奪ではなく、神に創造された世界を保持し、守ることである。つまり同 2:15 における עֲבָד の意味と、本質的に変わらない。むしろ祭司 (P) 資料は、「支配する」という強い言葉を使うことにより、紀元前 6 世紀の捕囚状態にある民に、神による新しい世界創造の希望を与えたのである。

2) 墮罪と労働

一方、創世記 3:8 以下の、墮罪に対する神の審判の結果、女は「苦しんで子を産む」(16 節) ことになり、男には辛い労働が科せられる。「土は呪われたものとなった」(17 節)。「お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで」(19 節) との判決が下される。神はアダムをエデンの園から追い出し、その地で耕作に従事するよう命じる (23 節)。J 資料は、こうした楽園の外での労働を、罪に対する刑罰とみなしているのだろうか。

第一に、人は、神に創造され、エデンの園にあったとき、すでに耕す者であった (2:15)。楽園にあって人は労働を命じられていた。労働は、人間が神に創造された存在であることのしるしであり、実質である。

第二に、しかしその人間の本来の、本質的部分を成す労働は、墮罪によって暗い影を宿すことになる。

「パラダイスにおいても、人間に労働が命じられていた。しかし、労働が人生をこれほど苦勞の多いものとする、労働がこれほど常にさまざまな失敗や徒勞に脅かされており、その努力がしばしばまったくの元の木阿弥になってしまうこと、その成果が多くの場合労働と比較して到底割に合わないこと、まさにこの事実を語り手は、神が定めた本来の秩序からは説明できない、創造世界における不協和音として描いている。」(傍点著者)²⁵⁾

楽園では、労働が災害や自然条件などにより徒勞に帰すことは想定されていなかった。しかしその外の現実世界では、農夫の努力は必ずしも豊かな実りを保証されない。収穫が得られず、多大の苦勞が無に帰すこともありうる。時として「土は呪われるもの」(3:17) であり、「茨とあざみを生えいでさせる」(3:18) ものとなる。墮罪後の人

間の労働には、こうした罪の影が伴っている。

しかし第三に、それは労働が呪いとなったことを意味しない。たしかに 3:17-19 では、労働における罪の暗い影が指摘されている。しかし 3:23 においては、事情が異なる。人は楽園でそうであったように、その外でも、依然として働くことが存在の本質であり続ける。労働それ自体が神の呪いではない。労働に伴う苦勞および、しばしばその無為性が、墮罪による呪いなのである。

「呪いとなったのは労働それ自体ではなく、労働と結びついた努力や苦勞であって、畑に生えるいばらやあざみがそれにつきまとい続けているのである。」²⁶⁾

人は罪の結果、神による罰として労働するのではない。労働自体は創造に際して神から与えられた人間の使命であり、祝福である。そのことは墮罪後も変わらない。変化したのは、労働が直ちにそのまま、神から与えられた使命遂行に結びつくとは限らなくなったということである。労働は人間にとって本質的な部分であり続ける。しかしそこには、なお罪の要素が入り込む余地がある。

3) 職業の多様化

H.W. ヴォルフは、J 資料において、人間の世俗労働がさまざまな方面へと発展を見せていくことに注目している²⁷⁾。

楽園の外にあっても、人は耕し (3:23)、羊を飼う (4:2)。農耕民と小家畜飼育者が現れた。続いて、天幕に住み、家畜を飼うベドウィン (4:20) と、町の家々や城壁を建てる建設者 (4:17) が誕生する。そして豎琴や笛を奏でる音楽家 (4:21)、青銅や鉄でさまざまな製品を作る鍛冶技術者 (4:22) を加える。さらには、ノアのようにぶどう栽培者とぶどう酒醸造家 (9:20-21)、都市の大規模構築物を建設する高度な技術をもった専門職集団 (11:3) も登場させている。

労働は各分野において専門化し、多様に拡大していく。それらもまた、神が創造時に人間に与えた労働の本質的部分を構成する。しかし同時に、楽園の外にあっては、労働がその本来の使命を離れ、人間の欲求に支配される危険を伴う。J 資料はそのことを見逃していない。

3. 箴言における労働

ソロモン王に代表される日常的な世俗的知恵は、イスラエルに古く発し、祭司がその蒐集と保存、民衆への伝達を担ったと考えられる。捕囚後、知恵の担い手は祭司から律法の専門家へ、さらに民間の知者たちへと受け継がれた。知者たちは、とくに紀元前2世紀後半のマカベア家の独立運動など、異教との戦いの中心となった。その後、彼らは古くから伝わった民間の知恵を集め、さらにギリシアやエジプトなどの外来格言も加え、「時代と共に広い視野に立ち、国際的な見識と、ヒューマニスティックな面をも合わせ持つに至った」²⁸⁾。知者たちは、私塾を設立し、それをとおして民衆を教育し、その影響は諸会堂にまで広がった。民衆への影響力は大きかったと考えられる。

箴言においてעֲבַדは2回のみ使用され、いずれも「耕す」と訳される。

「自分の土地を耕す人はパンに飽き足りる。意志の弱い者は空を追う」(箴言 12:11)²⁹⁾。

知者は勤勉を勧め、怠惰を戒める。同時に、富の限界と危険をも伝えている。

1) 勤勉の勧め

עָבַדは旧約全体で20回用いられ、うち9回が箴言に集中している。「勤勉」と訳されるのは5回で、その全てが、10:1-22:16の、箴言の中でもっとも古い格言集とされる部分に用いられている。この語を鍵として、箴言の労働観を見る。

(1)「手のひらに欺きがあれば貧乏になる。勤勉な人の手は富をもたらす。夏のうちに集めるのは成功をもたらす子。刈り入れ時に眠るのは恥をもたらす子」(10:4-5)

これは「ソロモン格言集」のなかで、知恵ある子どもについての両親の教えとして語られている。怠らず、よく働くのが賢い子どもとされる。知者が教育の対象としているのは、一部の富裕層ではなく、一般民衆とその子弟である。人々に、世俗の労働に励むことを神の意志として伝え、勧めた。このことは同時代のギリシアなどの労働観とは、明確に異なる。

(2)「勤勉な手は支配し、怠惰な手は奴隷となる」(12:24)

勤労を尊ぶ者は繁栄し、事業を拡大する。人を

雇い、その上に立つことになる。額に汗して働かない者は、他人の下に立ち、使用人となるほかはない。同様に、「勤め働く人は尊い宝を獲る」(12:27)³⁰⁾とも言われている。

「富は決して『与えられたもので』はなく、むしろ責任ある人間の手によって、造りださうものと見られている」³¹⁾。

知者は神が人間に働く能力を与えたとする。したがってその力を発展させ、用いて富を得ることが許されている。むしろそのように生きることが人間の責任である。その意味で、知者はJ資料の労働観を受け継いでいると言える。

(3)「怠け者は欲望をもっても何も得られず、勤勉な人は望めば豊かに満たされる」(13:4)

知者は民間教育家として、民衆の子弟に、どう生きるべきかを教えた。したがって箴言は個人の努力を強調する。貧富の差は、個人が勤勉であるか、怠惰であるかによって生じるとする。貧富の格差を生み出す社会の構造的問題にまで言及しない。そのことは21:5もまた同様である。

「勤勉な人はよく計画して利益を得、あわてて事を行う者は欠損を招く。」

利益を得るか得ないかは、個人の勤勉さ、労働の計画性による。本人がよく考え、準備して努力すれば富を得ることができる。その意味で箴言は楽観的である。個人の責任を問う。箴言は個人倫理を説く³²⁾のであって、社会倫理にまで踏み込んでいない。

箴言は勤勉を勧める。人間にとって労働は本質的な部分をなす。誰もが働く能力を与えられており、労働によって、神が付与した本来の自己を取り戻すことができる。

2) 怠惰に対する戒め

箴言は勤勉を勧める一方、怠惰を戒める。前項の、勤勉についての教えの多くには、怠惰を戒める教えが付属し、両者が対照される。

(1) 12:24、同27で「怠惰」と訳された原語はעָבַדで、旧約に15回出る。「怠惰」と訳されるのは箴言の4回およびエレミヤ書48:10だけであり、他はいずれも「欺き」や「偽り」となっている³³⁾。箴言では上述の箇所以外に10:4、19:15にも出るが、すべては勤勉およびその果実である財産と対照されて戒められる。

一方、「怠け者」עֲצֵלは旧約に14回出るが、その全ては箴言に集中している³⁴⁾。

(2) 上の2語から、箴言が「怠惰」および「怠け者」の特徴として挙げているのは下記の点である。

① 怠け者は眠り込む(6:9、19:15、24:33-34も同様の趣旨)。

② 労働にいそしまず、怠ける(20:4、24:30-31)。両箇所とも、耕作を怠った結果、畑は荒れ、崩れ、収穫を得られないという現実を提示する。

③ 食事という生活の基本的所作においてさえ、ものぐさになる(19:24=26:15)。怠惰の実際を誇張して強調している。

④ 欲望を懐くが、何も得られず(13:4)、その欲望のために身を滅ぼす(21:25)。

⑤ 自分の怠惰を認めず、正当な根拠のない弁解をする(22:13、26:13)。

⑥ 自分を賢い者とうぬぼれる(26:16)。

労働は、神が与えた人間の本質である。それを遂行せず、怠惰に陥ることは、神の祝福からの離脱である。与えられた労働の能力を用いて祝福を得るのか、それとも怠けて祝福を失うのか、箴言は個人に鋭く問いかけ、世俗の仕事に励むよう勧めている。

3) 富の限界と危険

箴言の知者は、勤勉を勧め、怠惰を戒める。貧困は怠惰から生じ、豊かさは本人の勤勉による。そこには、預言者のような、社会的不正義を追及する視点は見られない。社会倫理よりも個人倫理が優先されている。人が労働に励むならば利益を得、怠るならば欠乏に陥る。労働か怠惰かを選ぶのは人間自身である。その意味で知者は楽観的である。誰でも勤勉に努めるならば、成功するという前提に立っている³⁵⁾。

しかし箴言は富を勤勉の結果として無条件に認めてはいない。富が最終的な価値ではない。

(1) 箴言の教える豊かさはたんなる物質的利益ではない。

「主の道は無垢な人の力。悪を行うものにとっては滅亡」(10:29)

不正が戒められ、正義が求められる。基本は「主を畏れることは知恵の初め」(1:7、9:10)ということである。富を得るためだけに働くのではない。

むしろ富は、神への服従の果実である(10:16)。神に従うことが、利益追求に勝る。

「人間を豊かにするのは主の祝福である。人間が苦勞しても何も加えることはできない」(10:22)

労働は必ず利益や富を生むわけではない。その働きが主なる神の意志にかない、祝福に与る時にだけ、真の豊かさとなる。主の祝福を離れては、人の労苦は無為に帰すのである。

(2) むしろ箴言は、富の持つ危険を冷静に見つめる。

「富に依存する者は倒れる。神に従う人は木の葉のように茂る」(11:28)

ここでは神と富とが対立的に捉えられている。むしろ富の危険に注目し、それによらない生き方を勧める³⁶⁾。富に対する否定的な格言もある。

「財宝を多く持って恐怖のうちにあるよりは、乏しくても主を畏れる方がよい。肥えた牛を食べるよりも、青菜の食事であれ合う方がよい」(15:16-17)

さらに、富にも貧しさにも偏らない生き方を勧めている。

「貧しくもせず、金持ちにもせず、わたしのために定められたパンでわたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り、主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き、わたしの神の御名を汚しかねません」(30:8-9)

労働は尊い。それは神から人に与えられた本分である。それゆえ勤勉が勧められ、怠惰は強く戒められる。しかし富には誘惑がある。それによって驕り高ぶり、他者と争いあう。何よりも祝福の源である神から離れてしまう。そしてJ資料に見られた、神から与えられた祝福と賜物を失ってしまう。箴言は個人倫理を中心に語る。しかしなおそのなかでも、富や豊かさの本質を冷静に見つめている。

4. 預言者の場合

箴言の知者は勤勞を勧め、怠惰を戒める。彼らは一般民衆とその子弟に対する教育者であった。個人がいかに生き、働けば、生活の安定が得られ、祝福されるかという人生訓を語る。労働に励むならば祝福され、富を得る。怠惰に陥れば、祝福を

失う。たしかに富の持つ危険性、誘惑にも注意はしている。しかし全体的に見れば、知者が説いたのは人生の知恵であり、個人倫理である。

しかし個人の勤労によって必ず祝福が得られるわけではない。現実社会の構造的問題がある。歴史の大きな流れのなかで個人の運命が弄ばれ、押し流されていくこともある。それに注目したのが預言者である。彼らは個人の勤労を重んじつつ、なお社会の構造的課題を取り上げる。富める者が貧しい者を踏みにじり、富を独占するという現実を見逃さない。それに対する神の裁きを宣告する。さらにその後の希望をも語る。

1) アモス

(1) アモスは紀元前8世紀前半に北王国イスラエルの首都サマリアと聖所ベテルで預言活動を行った。最初の「記述預言者」とされる。彼は南王国ユダの荒野に接したテコアの出身であり、「牧者の一人」(アモス1:1)である。農業者であったアモスは、主の幻を示されてテコアを離れ、当時繁栄を誇った北王国で預言を行う。自身について、

「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ」(同7:14)と述べている³⁷⁾。

家畜や農地を所有していたのか、あるいは雇われて働く農業労働者であったのかは確定できない。しかし彼は、自らが職業的預言者ではなく、農業者でありつつ主の言葉を語る預言者として召されたのだという自覚を強く持っている。

「彼は予言を生業とするあの共同生活をしている預言者と見なされることを激しく拒否する。…彼は生計を支える自分の仕事を持っている」³⁸⁾

同15節の「主は家畜の群れを追っているところからわたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた」との叙述を、預言のためにアモスが牧羊と農耕という職業を放棄し、職業的預言者となったととることはできない³⁹⁾。

(2) アモスは農業従事者としての視点に立ち、さらに主の召しによって北王国の問題性を指摘し、痛烈に批判する。

当時の北王国はヤロブアム2世の統治下で繁栄を極めていた。北王国を脅かしてきたスリヤは

アッシリアの軍門に降り、しかもこの時アッシリア自身には、さらに戦線を拡大する余力がなかった。この好機にヤロブアム2世はヨルダン川東岸地域を制圧し、北王国の領土は拡大した。人々は軍事的勝利に歓喜し(同6:13)、商業の繁栄を謳歌する。作物を安価に買い求めて農民を搾取し(同8:4)、蓄財に走る。別荘を持ち、豪華な家具を備え(同3:12)、宴席で酔う(同4:1)。ベテルやギルガルなどの神殿に人々は群がり、多大の捧げ物が行われていた(同4:4)。

しかし他方で貧富の差が拡大し、貧しい者は生活に困窮する。債務奴隷化する者も現れる。

「彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ」(同2:6⁴⁰⁾)

繁栄と栄華に酔いしれ、倒錯した自信にあふれる民に、アモスは農業者の視点で罪を指摘し、神の裁きを語る。8:4-6では、農民に対する富裕商人の横暴と欺き、搾取を厳しく指摘している。

「このことを聞け。貧しい者を踏みつけ、苦しむ農民を押さえつける者たちよ。お前たちは言う。『新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。弱い者を金で、貧しい者を靴一足で買い取ろう。またくず麦を売ろう』」

(3) これに対し、アモスは神の厳しい審判を、しばしば農耕の用語で告げている。

①早魃による不作 「また、刈り入れにはまだ三月もあったのに、わたしはお前たちに雨を拒んだ」(同4:7)

②病虫害による農園の荒廃 「わたしはお前たちを黒穂病と赤さび病で撃ち、お前たちの園とぶどう畑を枯らせた。また、いちじくとオリーブの木は、いなごが食い荒らした」(同4:9)

③ありえないほどの罪の深さの指摘 「馬が岩の上を駆けるだろうか。牛が海を耕すだろうか。お前たちは裁きを毒草に、恵みの業の実を苦よもぎに変えた」(同6:12)

④いなごの害についての第一の幻 同7:1-6

⑤神の裁き 「見よ、わたしは麦束を満載した車がわだちで地を裂くように、お前たちの足もとの地を裂く」(同2:13)

北王国は今、軍事的成功と経済的繁栄を楽しみ、富裕者たちは満ち足りている。しかしその現実には罪に満ちており、神の審判の時は近い。

(4) この主の日の後に、回復が来ると預言する。その情景もまた、農耕の言葉で語られる。

「見よ、その日が来れば、と主は言われる。耕す者は、刈り入れる者に続き、ぶどうを踏む者は、種蒔く者に続く。…わたしは、わが民イスラエルの繁栄を回復する。彼らは荒らされた町を建て直して住み、ぶどう畑を作って、ぶどう酒を飲み、園を造って、実りを食べる」(同 9:13-14)

(5) アモスは農業従事者でありつつ、主の召命を受け、預言者となった。自身が富裕な特権階級に属さず、王国に養われる職業的預言者でもなく、農園で額に汗して働く者であったからこそ、北イスラエル王国の繁栄の陰に隠された罪と不正を敏感に感じ取り、それに対する神の裁きを語ることができたのである。

2) エレミヤ

エレミヤはアナトトの祭司の家系に生まれ、神の召しによって南王国ユダの預言者となった。その預言活動は、紀元前 627 年のヨシヤ王時代に始まり、同 586 年のバビロニアによるエルサレム陥落とユダの滅亡まで、40 年以上に及んだ。翌年、反バビロニア勢力の手でエジプトに連れ去られた。

その預言は大きく二つの時期に分けられる。前期は、ヨシヤ王のいわゆる申命記改革に関わり、それへの賛同から批判へと傾いた後、紀元前 609 年にヨシヤの子ヨアハズが廃位され、ヨシヤ王の改革の灯が潰えるまでである。後期は同年のヨヤキム王即位から、王国の滅亡と民の捕囚、そして自身のエジプトへの連行までである。

小論の主題と関連して、まず、27 章と 28 章、および同時代に執筆されたと思われる 29 章のエレミヤの手紙を取り上げる。次に、エルサレム陥落が迫るなか、エレミヤ自身、ゼデキヤ王に拘留されながらも、アナトトのぶどう畑を買い取ったことを記す 32:6-44 を検討する。

(1) エレミヤ書 27-29 章

ここには動詞 עֲבָד が 13 回、バビロニア王ネブカドネツァル⁴¹⁾に仕えるか否かという形で用いられる。ユダ王国が、エレミヤの主張のように

バビロニアに服従するか、それとも偽りの預言者の言うように抵抗するかが主題となっている。

すでにユダ王国はゼデキヤ王時代に入っていた。エジプト王ネコはゼデキヤを王とし、ユダ王国が反バビロニア勢力の最前線となることを期待した。しかしバビロニアの勢いは強く、むしろエレミヤはバビロニア王ネブカドネツァルを主の僕 (25:9) と呼び、ユダは彼に従うべきであると預言する。しかしゼデキヤは国際社会の動きを見誤り、エジプトの力を過大評価して反バビロニアへと動く。これに対しエレミヤは紀元前 594 年、首に軛をはめてゼデキヤに面会し、バビロニアに服従し、その軛を負うべきであると預言する (27:12)。

エレミヤは同年、同じく軛を首につけ、エルサレム神殿で預言者ハナンヤと対決する。ハナンヤはゼデキヤ王の意向に沿ってエレミヤの軛を碎き、バビロニアが敗れ、バビロンに連れ去られた捕囚の民が直ちに帰還すると語った (28:2-4)。それに対してエレミヤはハナンヤを偽りの預言者と断じ、バビロニアが鉄の軛となってユダの民を仕えさせると語る (28:12-17)。

おそらく同じ年、エレミヤはバビロンの捕囚民に手紙を書いた。それが 29 章の「エレミヤの手紙」である。その要点は以下のとおりである。

①捕囚の期間は長引く。29:10 では 70 年と言う。

②捕囚民はバビロンに定住し、働いて生活し、子どもを産み、養い育てるべきである (29:4-6)。

③自分たちを捕らえ移した敵国の町バビロンの平安を祈り求めるべきである (29:7)。

④捕囚民中の反乱分子が行う偽りの預言を信じて反バビロニア運動に加担してはならない (29:8-9)。

エレミヤはアッシリアの支配からバビロニアの支配へと移り行く時代の転換期に生きた。ユダ王国の滅亡と捕囚に立ち合った。歴史のうねりのなかで人々は翻弄される。しかしエレミヤは冷静に、王国の滅亡と捕囚を神の意志であるとする。敵国王ネブカドネツァルを神の僕と捉える。捕囚民に、腰を落ち着けて労働に励み、定着するよう勧める。やがて来るべき帰還の日に備えよと語った。

(2) エレミヤ書 32:6-44

背景となっているのは、紀元前 588 年から 587

年頃、バビロニア軍がエルサレムを包囲していた時期である。バビロニアへの服従を説くエレミヤは危険分子として王宮に拘留される。自身が捕らわれの状態、さらにエルサレムは陥落寸前にある。その状況のなかでエレミヤは主の言葉に従い、従兄弟ハナムエルの畑を銀17シェケルで買い取る(32:9)。エレミヤは、捕囚は長引き、エルサレムの荒廃も続く判断している。しかし捕囚はいずれ終わり、捕らわれた民が帰還する。その時には民は畑を買い、耕し、エルサレムは復興する。そのことを、畑を買うという行為によって象徴的に表している。パレスチナに帰り、日常的労働へと戻ることが、民の希望である。預言者にとって「主の日」すなわち終わりの時とは、労働からの解放ではない。むしろそれへの復帰なのである。

(3) エレミヤは危機の時代を生きた。自身は歴史の荒波の中に消えていく。しかし彼の考えによれば、神は歴史を支配する主であり、敵王ネブカドネツアルさえも、自身の僕として用いる。かの地にあっても捕囚の民を守り、生かす。したがって激動と危機の時代にあっても、いや危機の時代だからこそ、日常の労働に励むことに意味がある。それが、神から与えられた人間の責任である。そのことは捕囚の地だけではなく、将来、帰還が実現する時、さらに重要になる。

エレミヤは歴史の主なる神に信頼し、労働を神の民の本質と捉えた。預言者においてもJ資料の労働観は受け継がれているのである。

5. 安息日との関係における労働の意味

これまでに見たように、旧約は労働を重んじる。しかし人間が創造された最高の目的は労働自体にあるのではない。労働の日々は、安息と休息の日と組み合わせられている。むしろ安息日の存在が労働に意味を与える。そのことを、十戒における第四戒の安息日規定の叙述から確認する。

1) 聖別された日

安息日 **שַׁבָּת** は、動詞 **שָׁבַת** 「休む」、「仕事を止める」から派生した。しかしその起源についての研究は必ずしも定まっていない⁴²⁾。「安息日は伝承の中できわめて古いルーツを持っており、さらに、伝承の歴史の中でこれがかなり変形していった」⁴³⁾と言われる。

安息日規定は、出エジプト記20:1-17、申命記5:1-22の他に、多くの関連箇所にも見られる。それらは、大きく次の2種に分けられる。

①肯定的定式「6日の間、あなたの仕事を行い、七日目には仕事を止めなければならない」出23:12、31:15、34:21、レビ23:3

②否定的定式「安息日にはいかなる仕事もしてはならない」出20:10、レビ23:7

一般に②から①へと発展したと想定される⁴⁴⁾。しかし確定は困難である。むしろ問題の中心は、「聖別せよ」**קִדַּשׁ**という語にある。

「聖としなさい、という戒めは…単に仕事をしないとか休むということとは同定されず、それをこえて、聖なるものとする、という積極的行為を意味する」⁴⁵⁾ すなわち、第七の日を、第一から第六までの日々とは異なる日、主に捧げる主のための特別な日として、神のために取っておくことを意味する。

その第一の前提は、第一から第六までの日を労働の日とすることである。「六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし」(出20:9) なさい、と命じられている。安息日規定は、それ以外の日々に行われる世俗の労働を軽視も無視もせず、重んじている。しかし人間の本質は、ただ労働にだけあるのではない。むしろより高い本質が与えられている。それを明らかにするのが第七の日である。

したがって第二の前提として、七日目の安息日は他の日々と異なったものでなければならない。安息日には、これを神のものとして取っておくために、仕事は行われるべきではない。むしろそれは労働の疲れを癒すものとなる。しかし「…『思い起こす、忘れずにする』という動詞の使用は、単に仕事をしないことではなく、礼拝への積極的な参加を問題にしていた。…安息日は人道的関係からの、実際の休息の機会を提供しただけではなく、週の一部を神のために選び分けることにより、時間を神にささげることを意味した」⁴⁶⁾ 七日目の安息は「聖なる集会の日」(レビ23:3)であり、主のための安息日である。

旧約において、時間は神が治めるものである。そのことが安息日順守により、全イスラエルの民の生活の中に厳密に位置づけられている。七日目ごとの安息日に神を礼拝することによって、神と

民との本来の交わりが回復され、守られる。

2) 対象

安息日規定を守るべき対象は、「あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である」(出 20:10) とされる。

この規定により、七日目ごとの休息が保証される。「それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである」(出 23:12)。一家の主人だけでなく、家族や家畜、奴隷、さらに滞在する外国人にも休息が保証される。申命記 5:14 では「そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる」と明記される。神のもとにあって休息は平等に与えられる。年齢、性別、身分、国籍による差別はない。それは、神が世界の全被造物の主であるからである。したがって休息の恩恵は家畜にまで及ぶ。

しかし安息日は、たんに疲れを癒すだけの日ではない。主なる神が世界の全てのものの創造者であり、主であるゆえに、全ての者は安息日を主のものとし、主にささげるべきである。すなわち礼拝に参加するのである。

3) 安息日の根拠

(1) 出 20:11 には「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」と記される。

ここでは安息日制定の根拠は、創 2:1-3 の祭司資料による創造物語に置かれている。「この原因物語は、神の創造のわざにおける安息日の聖性に、その根拠を置いている。つまり、それは宇宙の構造そのものの中にうち建てられている⁴⁷⁾。」祭司資料の示すところによれば、安息日はシナイ契約において初めて与えられたのではなく、天地創造の初めから、神の意志として定められたものである。六日の労働を前提とする七日目の安息は、墮罪後に習慣化したのではなく、神と人間との本質的な関係を担保するものとして与えられた。それゆえイスラエルは、安息日を守ることによって神の民たりうる。神との契約に与ったしるしが安息日である(出 31:16)。ゆえにそれを破る者は死刑判決を受け、民の中から絶たれることになる(出 31:14-15)。

(2) 一方、申命記 5:15 では、第四戒の根拠は出エジプトの出来事に置かれている。

「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。」

たしかにここには、イスラエルがかつてエジプトで奴隷を経験したがゆえに、現在奴隷となっている者たちにも心に向け、彼らにも安息を与えるべきであるという人道的な契機を見出すことができる。しかしチャイルズは、文章の構造が、奴隷への同情を引き出す形になっていないと指摘する⁴⁸⁾。むしろ申命記の歴史家はここで、安息日の礼拝において、エジプトで奴隷であった先祖を救い、解放した神の恵みの記憶を新たにするように促していると考えられる。人道的な関心以上に神学的な関心が働いている。

「七日目毎にイスラエルは、神が解放者であること、また彼は過酷な奴隷所有者を打ち負かす方であり、なおも民を苦しめようとする独裁者に、決してひけをとらぬ方であることを思い出さねばならない」⁴⁹⁾ 安息日は、民が神による解放の恵みを七日ごとに確認し、改めて、歴史の主である神への服従を決意する時である。

この解放は、たんなる奴隷から自由人への政治的、身分的な変化ではない。神はモーセに「あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」(出 3:12。他に 4:23、7:16、同 26、8:16、9:1、同 13、10:3、同 7、同 8、12:31 も同じ趣旨) と語っている。出エジプトの目的は礼拝である。民が自由に、主を賛美することができるようにするため、神はエジプトの奴隷状態からイスラエルを解き放った。したがって安息日規定は、後にファリサイ派が理解したような「要求ではなくて、要求から解放するのである。それらは命令というよりも、申し出である。安息日は、自由な時間が贈られていることをはっきりさせてくれる」⁵⁰⁾ と言うべきである。

4) 旧約から新約へ

安息日の伝承は旧約で古い起源を持つ。イスラエルは、この安息日の礼拝によって、一方で天地創造の主を覚えつつ、他方で奴隷の地から解放した神の恵みを忘れず、感謝し続けた。

(1) 預言者たち

すでにアモスは、農民を押さえつける北王国イスラエルの悪徳商人ですら、安息日に商取引を控えざるを得なかった事実を報告している（アモス 8:5）。

エレミヤもまた、安息日の商品輸送をつつしみ、安息日を聖別すべきであると預言した（エレミヤ 17:21-22）。安息日は割礼と並んで、神の民のしるしとして重んじられた。安息日を守る者こそが神の民の一員にふさわしい。

第三イザヤは、安息日を主の「聖なる日」、「喜びの日」、「尊ぶべき日」と呼び、帰還した民に、この日には旅行や商取引を控え、神の安息の喜びに与よう勧めている（イザヤ 58:13）。

ネヘミヤは、復興しつつあったエルサレムで安息日に商取引を行う怒りを表明している（ネヘミヤ 13:15-18）。そこで彼は安息日には城門を閉じるよう命じている。

(2) 安息日の律法主義化とイエス以後

しかし安息日規定はやがて、割礼規定とともに、神の民のしるしという面が強調され、律法主義化する。その結果、イエスの怒りを招くことになる（マルコ 2:23-28 など）。しかし新約において安息日が無視され、労働のみが重んじられたわけではない。むしろ初代教会において、かつての七日目の安息日は、イエスの復活を記念する「週の初めの日」（マコ 16:2）へと移され、礼拝の日として重んじられることになる。イエスの十字架と復活によって罪と死から解放されたことを喜び、神を礼拝する日となった。まず第一の日に神の安息に与り、感謝して六日の労働へと向かう。旧約においても新約においても、労働は安息と密接に結び付けられているのである。

おわりに

J資料は労働が、被造世界の管理を委ねられた人間の務めであり本質であるとする。その事情は墮罪後も変わらない。

箴言の知者は、富の危険性を認識しつつも、勤労を勧め、怠惰を戒める。

預言者は、勤勉でありつつも搾取される人々が存在するという社会の構造的な問題にまで目を向ける。同時に、そのような世界であっても主の支

配は変わらず、終わりの日に労働が実を結ぶことを告げる。

しかし労働だけが、神が人間に与えた本質のすべてではない。七日目の安息日がある。これによって人は労働の疲れを癒され、何よりも神との本来的な礼拝の交わりへと招き入れられる。肉体とともに魂に安息が与えられる。安息日は六日間の労働を前提とし、労働は安息日によって意味あるものとなる。

現代では、休日の出勤や労働が常態化している。不況により経費削減と経営効率化が更に求められ、パート労働者の解雇や常勤務者の労働条件悪化が進む。しかし旧約によれば、労働は神が人間に与えた本質である。その労働は、神の創造と救いに基づき、安息日に神との交わりを与えられることによって意味づけられる。体と魂の安息によって人は、神から与えられた使命として労働に励むことができる。今日の社会には、聖書に聞くべきことが数多くあると言わざるをえない。

<注>

- ヘシオドス『労働と日』308-311行 松平千秋訳 1986年 48頁
- ただしヘシオドスは、歴史は黄金の種族の時代に始まり、銀の種族の時代、青銅の種族の時代、英雄の時代、鉄の種族の時代へと変遷したとする（前掲書 106-201行）。当初、労働は喜びであったが、プロメテウスが火を略取したため、人類はゼウスの怒りを買ひ、鉄の時代へと移行した。その結果、労働は苦役となり、人間に唯一残された道となったとする。したがって労働には、懲罰ないし苦役という消極的面と、なお勤勉に励むことによってゼウスの怒りを解くという積極的面との両面が認められる。
- 「諸君のうちの若い人にも年寄りの人にも、誰にでも、たましいができるだけすぐれたよいものになるよう、ずいぶん気をつかわなければならないのであって、それよりも先に、もしくは同程度にでも、身体や金銭のことを気にしてはならないと説く」（傍点原著者）『ソクラテスの弁明』29 田中美知太郎訳 1975年 84-85頁
- プラトン『国家』Ⅲ 415、藤沢令夫訳 1976年 251-256頁
- 「もし大工が靴作りの仕事をしようとしたり、靴作りが大工の仕事をしようとしたり、お互いの仕事道具や地位を取り替えたり、あるいは、同じ人間がその両方の仕事をしようとしたり、その他すべてがこうして取り替えられるとした場合、何らかの重大な害を国家に与えることになるだろう」同書Ⅳ 434（同書 298頁）

6 表1～表4 3頁に掲載

7 創世記 29:15、30:26、31:41 など。

8 出エジプト記 1:13、同 14、5:18 など。

9 民数記 3:7、4:23、7:5、8:15、18:6 など。

10 創世記 2:5、同 15、3:23、4:2、同 12。

11 エレミヤ書 25:11、27:6、同 11、28:14 など。

12 出エジプト記 3:12、7:16、同 26 など。

13 出エジプト記 8:16、9:1、同 13、10:3、同 7、同 8、同 11、同 24、同 26、12:31。

14 例えば、申命記 8:19 など。

15 例えば、エレミヤ書 25:6 など。

16 エズラ記 6:16「(神殿の奉献を) 行った」、ダニエル書 6:28「(不思議な御業を) 行い」など。

一方、עֲשָׂהが「労働する」「働く」の意味で用いられる場合がある。出エジプト記 5:9、ネヘミヤ記 4:15 など。

17 申命記 5:6、6:12、7:8、13:6 など。

18 イザヤ書 41:9、43:10、44:1 など。

19 イザヤ書 42:1、49:5、52:13、53:11 など。

20 Brueggemann, W. *Genesis Interpretation A Bible Commentary* 1980 向井孝史訳 1982 年 日本基督教団出版局 92 頁21 Rad, G. von *Das Alte Testament Deutsch Genesis* 1976 山我哲雄訳 I 1993 年 ATD・NTD 聖書註解刊行会 119 頁

22 Brueggemann, W. 前掲書 92 頁

23 但し、墮罪の結果、エデンの園から人間が追放される。それ以後は、創世記 3:24 によれば、ケルビムと剣の炎が園を守り、人間は園の外の世界で労働し、これを守ることになる。

24 創世記 1:26、同 1:28

25 Rad, G. von, 前掲書 146 頁

26 Wolff, H. Walter *Anthropologie des Alten Testaments* 1973、大串元亮訳 1983 年 日本基督教団出版局 262 頁

27 Wolff, H. Walter 前掲書 262 頁

28 興梠正敏『箴言』1986 年、新教出版社。1 頁

29 他に箴言 28:19。この箇所も 12:11 と同じ内容となっている。

30 興梠訳。興梠正敏、前掲書 54 頁

31 Wolff, H. Walter 前掲書 263 頁

32 その点は、後のシラ書も同様であり、「契約をしっかりと守り、それに心を向け、自分の務めを果たしながら年老いていけ。罪人が仕事に成功するのを見て、驚きねたむな。主を信じて、お前の労働を続けよ。貧しい人を、たちどころに金持ちにすることは、主にとっていとまたやすいことなのだ」(11:20-21) と、労働の重要性を述べている。

この「務め」や「労働」はעֲבָדの訳であるが、この語はほんらい、祭司などが行う宗教的な務めを意味した。それが後に宗教性を失い、「仕事」、「職業」、「働き」など、世俗的な意味で用いられるようになった。ここでは、世俗の職業に励むなら、神は祝福として富を与えると信じられている。

33 他は、ヨブ 13:7、27:4、詩編 32:2、52:4、78:57、

101:7、120:2、同 3、ホセア 7:16、ミカ 6:12。

34 箴言 6:6、同 9、10:26、13:4、15:19、19:24、20:4、21:25、22:13 (=26:13)、24:30、26:14、同 15、同 16。

35 一方ヨブは「乏しい人々は道からおしのけられ、この地の貧しい人々は身を隠す。彼らは野ろばのように荒れ野に出て労し、食べ物を求め、荒れ地で子に食べさせるパンを捜す。自分のものでもない畑で刈り入れをさせられ、悪人のぶどう畑で残った房を集める」(ヨブ 24:4-6) と述べる。貧しい者の労働が報われない社会的矛盾を訴える。

コヘレトもまた「まことに、人間が太陽の下で心の苦しみに耐え、労苦してみても何になろう。一生、人の務めは痛みと悩み。夜も心は休まらない。これまた、実に虚しいことだ」(コヘ 2:22-23) と語り、勤労が必ずしも充足に結びつかない現実を嘆く。

36 イエスの「あなたがたは、神と富に仕えることはできない」(マタイ 6:24) との言に通じる。

37 アモスは自身に神の言葉が与えられたことを否定しているわけではない。むしろ自分が、王や王国に仕え、その意向に影響される職業的預言者ではなく、ただ神の召命のみによって語ることを宣言している。

38 Weiser, A. *Das Buch der zwölf Kleinen Propheten*, ATD 1979、秋田稔・大島征二・大島春子訳 377 頁

39 同書、379 頁

40 なお同 8:6 も参照

41 旧約では「ネブカドネツアル」という表記で王下、代上下、エズラ、ネヘミヤ、エステル記に、ダニエル書においては 28 回すべてがこの形で出る。エレミヤ書においても 8 回見られるが、一方、「ネブカドレツアル」という表記が 30 回近く、エゼキエル書の 4 回と並んで出る。エレミヤでは後者が 80% 近く使用されている。しかし 27-29 章の、エレミヤと偽りの預言者との対立を主題とする 3 つの章においては、29:21 を除き、前者が用いられている。この 3 つの章がまとまりをもって置かれていることが推測される。

42 バビロニアの sapattu に由来するとし、元来、満月の祭を意味したとも言われる。しかしこの太陰暦から七日を一週とする時間設定へと、いつどのように移行したか、説明は説得的ではない。また、ケニ人のタブーの日を起源とする説にも、有力な根拠は見られない。

43 Childs, Brebard S. *The Book of Exodus A Critical, Theological Commentary* 近藤十郎訳 下 1974 年 126 頁

44 Wolff, H. Walter 前掲書 276 頁

45 Childs, 前掲書 129 頁

46 Clemnts, Ronald E. *Exodus The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible*, 1972 時田満彦訳 106 頁

47 Childs, 前掲書 129 頁。この事情を詩人は、「後の世代のために、このことは書き記されねばならない。『主を賛美するために民は創造された』」(詩 102:19) と美しくまとめている。

48 Childs, 前掲書 131 頁

49 Wolff, H. Walter 前掲書 277 頁

50 Wolff, H. Walter 前掲書 278 頁